

# ふたつの「ベリセール」 デフォンテーヌとロトルー

浅谷真弓

17世紀に「ベリセール」と題される作品は三つ書かれた。最初はデフォンテーヌが1641年頃、次いでロトルーが1642年から43年頃、そしてラ・カルプルネードが1659年に同じ題材を用いた作品を上演している。これらの作品に共通するのは、いずれもオテル・ド・ブルゴーニュ座が演じていることである。二番目の作品から三番目までは約16年が経過しているが、最初の二作は1、2年のうちに、つまり観客も役者も二つのあいだの共通部分や異なった部分などを比較しながら見たり、演じたりできる期間で書かれたことになる。仮にロトルーがデフォンテーヌの上演を見ていなかったとしても、受け手はその違いを意識したであろう。残念ながらラ・カルプルネードのは未刊行とされている。できれば「ベリセール」という共通のテーマを通して三人の作者の個性や時代性を比較したいところだ。今回は残されたふたつの「ベリセール」を読んで、少しでも当時の観客の気分を味わいたいと思う。

## 物語の概要

ふたつの作品とも、6世紀に実在したベリサリオスを主人公にし、同じスペインのコメディアが出典である。簡単に物語の軸を説明すると、ユスティニアヌス皇帝の皇后テオドラがベリサリオスを拒絶されたのを恨んで、彼を殺そうとするというものだ。以下でふたつの作品を事件中心に対照させてみよう。尚、便宜上、作者の頭文字を取って二作品を区別する。登場人物名もフランス語のものとする。

### 1) 事件の発端

D: テオドールは皇后になる以前、ベリセールに好意を抱いていたが、拒絶され、凱旋して戻った彼を一層憎む。

R: テオドールは皇后になる以前、ベリセールに好意を抱いていたが、拒絶され、恨み続けていた。

### 2) ベリセールの帰還

D: ベリセールはザクセン女王アマラゾントをゴート王ヴィティジェの侵略から救い出し、その領土をジュスティニアン皇帝の支配下に置く戦いから帰還した。

R: ベリセールはインド方面の反乱を平定し、凱旋帰国した。

### 3) 最初の暗殺事件

D: ベリセールの副官であり友人のナルセスがソフィーとの結婚を条件にテオドールに命じられるが、果せない。皇后の差し向ける別の暗殺者を未然に防ごうとして、逆にそれと分からず

にベリセールに討たれ、自殺する。

R: ベリセールの部下であるレオンスが昇進を条件にテオドールに命じられる。巡礼者に変装して接近するが、ベリセールはそれと分からずにレオンスの功績を称え昇進を約束するので、暗殺を果せず、当初の目的に反して、彼に暗殺の警告を行う。

#### 4) 第二の暗殺事件

D: デンマーク王子のイスキリオンがソフィーとの結婚を条件にテオドールに命じられるが、本人に会ってみるとそれが命の恩人である分かるので、果せない。暗殺する代わりに、永遠の友情を誓う。

R: ベリセールの副官のナルセスが昇進を条件にテオドールに命じられる。眠っているベリセールを刺し殺そうとするが、枕元の書類に自分の昇進を告げる文を見付け、果せない。書類に暗殺の警告を書き加え、剣を添えて去る。

#### 5) 第三の暗殺事件

D: 皇后の手下のドリステルが昇進を条件に命じられる。眠っているベリセールを刺し殺そうとするが、枕元の書類に自分の昇進を告げる文を見付け、果せない。暗殺の警告を書き、その紙を剣で留めて去る。

R: 皇帝の側近のフィリップが昇進を条件に命じられる。しかし、この計画を知ったレオンズとナルセスが彼を襲い、偶然通りかかった(実はフィリップが待ち伏せていたのだが)ベリセールに助けられる。皆が顔を隠していたので互いの区別がつかないまま、フィリップはベリセールに再会し、彼こそ自分の命の恩人と分かり、殺せない。

#### 6) 皇后自身による最後の暗殺

D: 偽手紙で罠にはまり、投獄されたベリセールを救おうとしたイスキリオンの剣を取り上げ、刺し殺そうとする。イスキリオンに止められ、またベリセールの弁明に説得されて諦める。

R: 眠ったふりをしているベリセールのところへ、それと知らず忍び込み、刺し殺そうとするが、タピスリの後ろに隠れていた皇帝とその側近に止められ、殺せない。ベリセールは皇帝に与えられた権限により、皇后を特赦する。

#### 7) 結末

D: ベリセールとソフィー、アマラゾントとヴィティジェの婚約が承認される。

R: 皇后の偽手紙でベリセールは投獄され、横恋慕に怒った皇帝の判決で処刑される。処刑後、真相が明かされる。

このようにベリセール殺しは皇后の刺客によって三度、皇后自身の手で一度、都合四度行われる。四度とも未遂に終わり、彼の生死は結局、皇帝の裁量に任されていることがわかる。同じ題材を取りながら結末は正反対になっている。デフォンテーヌでは皇帝もまた三人の暗殺者や皇后同様にベリセール殺しは未遂のままだが、ロトルーでは劇中誰もなし得なかったことを見事に成就する。ここでこの物語はテオドールによるベリセール殺しから、ジュスティニアンによるベリセール殺しへと急転する。

## 犯人探し

### 1) 防御と攻撃

前節で見たように暗殺未遂は合計四度で、その度にベリセールは彼の美德あるいは高潔さによって自分の命を救う。デフォンテーヌにおいてはすべてがそうであり、またロトルーにおいても最後の皇后の特赦に至るまではこの方法が有効であった。これはなにもベリセールのみが美德に武装された人物であるというわけではない。そのようなベリセールの高潔さを受け入れ、他人の評価を公平に行ったことを認めたり、命の恩人に報いたりすることを当然と思うような相手の方の人格が問題になるのだ。もし彼ら刺客たちがベリセールの美德という武器の通じない人物たちであったならば、彼の行為は愚か者となじられて終わりである。テオドールの口を借りて言えば、毒のように間接的で時間のかかる手段ではなく、剣で刺し殺すという最も確実に直接的な手段に対しては、あまりに無力というほかあるまい。案の定、ロトルーのテオドールはベリセールの高潔さに神経を逆撫でされて恨みを募らせる。しかし一方で、こうも言える。ロトルーのテオドールはベリセールの高潔さを深く知り過ぎたためにかえって彼にひかれ、そのような高潔な人物に愛されないことを口惜しく思い、彼を殺さざるをえなくなった。また、皇帝も彼の過去の高潔な「外見」に似合わぬ横恋慕に精神の平衡感覚を失った、と。ベリセールの美德はデフォンテーヌでは無敵の象徴なのだが、ロトルーでは文字どおり両刃の剣といえる。どちらにしる、雑踏、睡眠中、暗闇など、殆ど物理的には無防備なベリセールにとって、「高潔さ・寛容」は重要な防御手段である。これに対し、テオドール側の攻撃は野心、嫉妬を導火線に使っている。野心は昇進の約束、闇討ちの助太刀などによってすぐに帳消しにされてしまう。条件が単純なので、それを満たすのは容易である。剣を使って殺すのも条件を課された本人なのだから、実際の行為を中止するまでのタイム・ラグはまったくない。しかしロトルーの皇帝の嫉妬と拘束から処刑までの経緯は皇帝以前の、いまでは改心したはずの三人の暗殺者たち、皇后の四人を媒介にして行われる。処刑はここではない別の場所でフィリップが行う。皇帝の現在の迷いは無効である。残虐な場面を舞台に示さないビヤンセアンスの生んだタイム・ラグがベリセールの悲劇を速めているようにすらおもえる。勿論デフォンテーヌでも同様の結末に瀕するわけだが、そこでは、物語の最初にベリセールに命を救われた恰好になっているヴィティジェとアマラゾントの皇帝に対する説得がおかれており、ベリセールと皇帝の両者に均等に時間と媒介者が配分されている。先にも述べたとおり、デフォンテーヌの人物たちは全員がベリセールの高潔さにむらなく反応できる。暗殺者たちの野心と皇帝の嫉妬が同じ価値で動いているのだ。そうしてみると、デフォンテーヌの野心と嫉妬、ロトルーの野心は同じように解決が可能である。ただロトルーの皇帝の嫉妬だけがテオドールがベリセールの高潔さに対抗できる攻撃の手段である。その嫉妬をうまく引き出すための手口として、偽手紙がある。

### 2) 手紙のトリック

デフォンテーヌ、ロトルーともに皇帝の嫉妬を引き出す手口として、ベリセールが書いた手紙を使用している。しかし二作品で、その性格はかなり違っている。具体的にその場面を検討してみよ

う。

まずデフォンテーヌであるが、問題の手紙の場面は第五幕の三場に設定されている。第三の暗殺に失敗し、ドリステルに裏切られたことを知ったテオドールのモノローグが直前の二場にあり、ベリセールからの手紙の宛て先人であるソフィーが開いた手紙を手にして登場する。このト書きは示唆的である。つまり、ソフィーにとって手紙の内容が他人に知られるのを憚られないものであるか、あるいはあまりの衝撃に自失状態にあるかのどちらかであるということだ。つぎのせりふで、両方が肯定される。

ソフィー : ああ、なんという無礼、悪行であろう。

テオドール : 姪よ、何があなたをそんなにも狼狽させるのか。

ソフィー : ある人物がわたしに着せた濡衣への恐れです。お聞きになって、ご覧になって、お読み下さい、どうした訳か判断して頂きたいわ。

テオドール : ああ、心が燃えるようだ、でも手が震える、目隠しをしたつもりで、自分を裏切ってはいけない。わたしの死の判決を笑って読もう。(ベリセールからソフィーに宛てた手紙を受け取る)「わたしを気にいらぬ惨い姫君よ、わたしはあなたの手からいま放たれて来たものをあなたの目に返しましょう。その矢はまったく人間のものとは思われない。それはわたしから命を奪い、あなたを満足させるだろう。もしあなたの厳しさが、この剣を通して血みどろの勝利をもたらし、あなたに奉仕するのであれば、従う準備はできている。よろこんで攻撃を受けよう。しかしどうか恋がわたしの罪であるように。高慢な美がわたしの処刑者だ。ベリセールより」(以下省略)

ベリセールのこの手紙をテオドールはつれないソフィーに対する熱烈な恋文だと思っている。しかし実は、これは三度の暗殺の警告によって、告白を受けながら拒絶したソフィーこそが自分の命を狙っている「ある女」だと誤解し、殺される前に自分で進んで死んでやるという捨てぜりふなのである。ベリセールが恋する女は前節でも示したようにソフィーではなく、ザクセン女王のアマラゾントである。ソフィーはベリセールの真意を理解しているためにテオドールに判断を仰いでいるのだが、ふたりのいきさつを知らない皇后は続く五場でこの「恋文」を利用した陰謀をたくらむ。

テオドール : さて、ご立派なベリセール殿、もうおまえはわたしの怒りから逃れられない。死なねばならない。その判決はくだされました。この手紙がそれを決めました。そう言うておいたはず。おまえが恋する女が自らここでわたしの共犯者になってくれる。(以下省略)

手紙はテオドールにベリセールが届けさせた「恋文」にされ、皇帝の嫉妬を引き出す。ロトルーの方は第四幕の四場でベリセールとテオドールが対峙した後、皇后が彼をひざまずかせようとする策略から逃れ、アントニーを呼び、彼女にすれちがいがさま、手紙を渡すというもの。皇后は目ざとくそれを認める。

テオドール : (前文省略)そして、その紙は何。

アントニー : 何のことですか。

テオドール : (アントニーの袖口からベリセールの手紙を取り上げる)何を隠しているの。

アントニー : 陛下、それは……

こちらはベリセールからアントニーに宛てた手紙で、皇后の陰謀を知って、それに利用されまいとして彼にわざと冷たくしていたアントニーを、やはり警告によって疑う内容である。ソフィーとちがうのは、彼女が手紙を読む時間を与えられておらず、まさか彼が自分を恨むとは思えないで、自分宛ての恋文と考えている点だ。そして手紙は皇后ではなく、自分宛てと差し出した皇帝によって読まれる。五幕五場。

皇帝 : (前文省略)「わたしの死があなたにとって喜ばしいと、またあなたの美しい両手がそのような行為にかかわっていると思ったとき、わたしのもてるものも、希望するものも、すべてが美しい死には劣るのだと納得がきました。あなたの目や手の一撃で、あなたにつながれたまま死ぬことを、わたしの心は嘆いたり致しません。もしあなたの手が実際にわたしを支配してくれたなら、あなたの目がそうしてくれたとしたら、どんなに嬉しいでしょう。ベリセールより」

ロトルーのこの手紙にはデフォンテーヌの手紙とは違って、多少とも恋文の性質がある。ふたりはテオドールの陰謀さえなければ相愛である。だから皇帝の「嫉妬」は半ば正当なのだ。ロトルーの皇帝の嫉妬だけがベリセールの美德に対抗すると言った。彼自身の弁明は皇帝に対して直接相当に長く行われるのだが、全然信じてもらえない。テオドールへの横恋慕が皇帝の嫉妬の正体のすべてであるのだろうか。ジャクリーヌ・ヴァン・ベランが述べるように、ベリセールが皇帝に並んだ瞬間に、皇帝が「被造物としての分身」を越え出る彼を消したと考えるべきか。

### 3) 誰が犯人なのか

劇の進行に従って見れば、両方のベリセール殺しはテオドールによって行われる。「ある女」に身に覚えがないベリセールが真犯人を知るまでが、物語の前半の中心課題である。後半は冤罪との戦いに焦点がある。ロトルーの皇帝の嫉妬を利用して、テオドールは目的を遂げているわけで、第二の局面では、皇帝は殺人の道具にすぎない。また、ベランにしたがって言えば、第三の局面では、皇帝の意志を越えて成長してしまった分身を殺すために、テオドールは単にきっかけを与えただけだということになる。その経過は第一幕から処刑まで、丹念に描かれている。ここでは、皇后の方が皇帝の道具となっている。しかし、皇帝の分身殺しは第一幕からの結果として成立するものと言えるのだろうか。たしかにベランが述べる通り、皇帝は自分の虚栄心を満たすためにベリセールをとりたてたり、捨てたりしている。ベリセールは皇帝の鏡の中の虚像を演じる限りにおいて存在を許される。王冠、王杖を半分に分けて見せた皇帝でも、妻まで分けることはできないとはいえ、ベリセールの弁明を真実とすれば、彼は何度も皇帝の命を救って来たのである。いつきの気まぐれか乱心として留保してもよかったのではないだろうか。デフォンテーヌの皇帝がふたりの謀反人に耳を傾けたのに倣って。皇帝の分身殺しはもっとそれより以前、彼がベリセールに凱旋の褒賞を与える以前から始まっていたとは考えられないか。それも皇帝自身が意識するはるかに前から。テオドール

ルがベリセール殺しの動機を語る場面に戻って、その時期を推定してみよう。第一幕第三場のテオドールの聞き役への打ち明け話。

テオドール：でもわたしはあの男が嫌いです。おまえの称賛は空々しい。わたしが毛嫌いする人間を称えれば、もっと憎しみは増します。彼の勇気は知っています。彼を高く買い過ぎてました。彼に望む不幸は、彼を愛してしまったため。わたしの憎悪はいらだった恋の結果。彼にはそんな恋はふさわしくなかった。その恋を彼ははねつけた。皇帝がわたしに目を注ぐ以前、そしてわたしに婚礼のしるしをくださる以前に、その前に否定したはずの奔放さで、わたしの目はわたしをあの横柄な男に向かって差し出していました。しかし彼はわたしのまなざしを聞かず、君主たちをひきつけたわたしの魅力にも無関心のようにでした。わたしの口は目のあとで彼に苦しみを語りましたが、まなざし同様に言葉も無力でした。その高慢な男がわたしの心を支配している間、わたしの願いに対する代償はと云えばすべてが軽蔑でした。愛情に報いることのない魂に好意を注ぎ続けたのです。(中略)あのように卑劣な扱いを受けて苦しめられて以来、この拒絶された恥はわたしの身分とともに大きくなり、彼の死を誓わせるようになりました。そしてわたしの恨みに好都合に運命は働きました。恋人ではなく彼を臣下として仕えさせ、皇帝が、ベリセールの拒んだ(わたしの夫という)役につかれたとき、その主人の選択によって(アントニーを選ぶような)悪趣味なまねをしてみせました。

皇后になることはテオドールにとってベリセールへの勝利には映らなかった。むしろ彼の捨てた自分を拾った別の男である皇帝がベリセールより劣った人物になってしまったのだ。テオドールという安い買い物をすることで皇帝はその価値を落とす。テオドールの身分が上がる、つまり皇帝の愛情が増大するに従って拒絶の威力も大きくなり、皇帝はベリセールの価値に追い付けなくなる。ベリセールが手柄を立て、皇帝の命を救い、殺人者たちを許す高潔さを示せば示すだけ、その分、皇帝はテオドールを媒介にして階段を降りていき、対照的な人物を演じさせられる。愚劣で鈍感で統治能力に欠け、嫉妬深く、騙され易い男。ロトルーのジュスティニアンが最後に押し付けられる役回りはベリセールのそれに比べ、悲惨ですらある。この愚かな王は、ここでもやはり、テオドールの自尊心を満たすために利用されている。ベリセール殺しは最初の判断通り、テオドールという悪女の極めて個人的な事情によるものなのか。そうではないだろう。テオドールが皇后にならなかったとしたら、彼女のベリセールに対するこのように激しい殺意はありえなかつただろう。皇后の身分が彼女に殺人を教唆したのである。あるいは皇后の身分と引き換えにベリセールを殺すことになったと言い換えても良い。これを個人的な事情と割り切れはしない。誰も直接彼女にそうしろと言った者はいない。舞台の上に登場するジュスティニアンは彼女に嫉妬を呼び覚まされるまで、自ら作った傑作、作品であるベリセールを皇后と同じように、もしかすると皇后以上に愛していたかもしれぬ。だからテオドールにそれを強いたのは彼女の前にいるジュスティニアン個人ではなく、「皇帝」の身分であり、彼女自身がその秩序の維持にかかわることになった宮廷社会の組織のありかた

なのではないか。その組織には「皇帝」はふたりいない。ベリセールを殺すのはテオドールでも、ジュスティニアンでもなく、彼自身がそこで自己実現を果して来た宮廷社会そのものである。

## 宮廷社会の登場人物たち

ベリセールが自己実現を遂げた宮廷社会では、軍事的な功績とそれをめざさせる勇氣、高潔さを示すことが有効な出世の手段となる。この二つは常に絡み合っていて、功績をあげればそれは高潔さの証拠となり、高潔さを示すには功績が必要だった。身分の上昇はそのまま高潔さの度合を表示したので、当然ながら生れつき高い身分にある者はそれだけ功績を要求され、建前上は結果であるはずの身分の表示にあらかじめ拘束を受けている。ノブレス・オブリージュの世界であり、デフォンテーヌ、ロトルー両者の登場人物たちは全員がこのヒエラルキーに忠実である。この社会ではベリセールの高潔さという美德が有効な武器となり、また彼のその美德の理解の度合が各人物の身分に一致しているように見える。単純な役職の昇進から複雑で重要な権限の拡大まで、登場人物たちはベリセールの美德との拘わり方を基準にその社会で演じるべき役割を割り当てられる。ベランはロトルーの暗殺者たちの身分が回を追う毎に上がっていき、それはベリセールが皇帝から与えられる権限の上昇に従っていると指摘している。デフォンテーヌの方は必ずしもそのような組み立てをされていないように思う。次に各人物をその身分によって分類し、対照させてみよう。まず最初に両者の登場人物表をあげる。

### デフォンテーヌ

ジュスティニアン：コンスタンティノーブルの皇帝

ヴィティジェ：ゴートの王

イスキリオン：デンマークの王子

ベリセール：ジュスティニアンの下の軍隊の将軍

ナルセス：ベリセールの副官

ピランドル：護衛たちの隊長

ドリストル：兵隊

ディオファント：ベリセールの下僕

テオドール：皇后、ジュスティニアンの妻

ソフィー：ジュスティニアンの姪

アマラゾン：ザクセンの王女

合計 11 人。

### ロトルー

帝王：コンスタンティノーブルの皇帝

テオドール：皇后

ベリセール：軍隊の将軍

ナルセス、フィリップ、レオンズ：皇帝の側近

アルヴァール、ファブリス:ベリセールの側近

アントニー:ベリセールの恋する女性

カミーユ:皇后の侍女

合計 10 人。

これらの人物たちには劇中ではより細かな身分の振り分けが行われている。皇帝、皇后、ベリセール、ベリセールと恋する女、暗殺者たち、その他の順に見ていく。

**皇帝:ジュスティニアン、コンスタンティノープルの皇帝**

D:ベリセールの高潔さを最も良く理解し、皇后に対する「恋心」にも、最終的には寛容の態度で許そうとする。それがベリセールが彼に示して来た高潔さに報いる唯一の方法であり、ベリセールに優位を示す方法でもあると知っている。寛容の怪物。宮廷人の模範。

R:ベリセールの高潔さを良く理解している。彼を自分が作った最高傑作だと思っている。分身とまで言うが、それは巧妙な嘘である。ベリセールの高潔さが彼のそれを越えようとするとき、この嘘は暴かれる。ベリセールを冤罪で処刑したため、結局彼を凌駕するチャンスを永遠に失い、皇帝としての面目を潰す。地上から彼を葬ったことでようやくその地位を確保したにすぎない。テオドルが体現する宮廷社会の道化。

**皇后:テオドル**

D:皇后になる以前にベリセールに恋していたが、拒絶された。逆恨みによって彼に「復讐」を企てるが、実はまだ彼にひかれている。ベリセールの礼儀と身分を弁えた尊敬の念を捧げられてあっさり殺意を捨てる。

R:皇后になる以前にベリセールに恋していたが、拒絶された。皇后の身分を得るとともに、ベリセールへの復讐心は激化し、ベリセールの言う礼儀や身分の弁えにも動じない。彼の高潔さが皇帝のそれを越えていることを皇后になる前から感じ、自分を媒介にふたりを比較し続ける。既存の宮廷社会の秩序の維持を行う。

**ベリセール:ジュスティニアンの軍隊の将軍**

D:高潔な将軍。劇中では王子。冤罪で処刑されそうになるが、皇帝の寛容、皇后の慈悲に救われ、死を免れる。常に身分を弁え、友情に篤い。

R:高潔な将軍。劇中では皇帝の臣下。冤罪で処刑される。魂の不滅を信じて、最後は皇帝の無理解にも進んで首を差し出し、死んで他の追従を許さない存在となる。皇帝の唯一の脅威。宮廷社会の高潔さという美德の殉教者。

**ベリセールと恋する女**

D:アマラズント:ザクセンの王女。劇中では女王。侵略者のゴート王、ヴィティジェと相愛関係にあるが、ベリセールに言い寄られ、困惑している。しかし、恋するヴィティジェの命を救ってもらった恩に報い、ジュスティニアンに口添えして、その助命嘆願を行う。

D:ソフィー:皇帝の姪で王女。ベリセールに片恋している。打ち明けて拒絶されるが、説得されて冤罪で投獄された彼を救出に行く。救出の代償に、うちとけたベリセールと婚約する。



R: アントニー: 正確な身分は不明。しかし侍女ではないようだ。テオドールの復讐の道具となるのを恐れてベリセールに冷たくしているが、以前から彼の恋人である。なんの権力もなく、彼を救うことができないばかりか、テオドールに決定的な陰謀の手段となるベリセールの手紙を奪われる。手紙を奪われた後の消息は、侍女の報告によれば、ベリセールの処刑を知って狂乱状態に陥った以外は不明。

#### 暗殺者たち

D: イスキリオン: デンマークの王子。はじめソフィーとの結婚を条件にベリセール殺しを説かれるが、命の恩人と分かって友情を結ぶ。投獄された彼を助けるべく奔走する。ソフィーの彼への気持ちを知って身を引く。ベリセールの高潔さを理解し、感化された。

D: ナルセス: ベリセールの副官で友人。イスキリオンがベリセールの殺しに来ることを知って先回りし、彼を殺そうとするが、顔を隠していたので逆にベリセールに討たれる。ソフィーへの恋心とベリセールへの忠誠の板挟みであって出した結論だが、自殺めいた最期を遂げる。

D: ドリステル: テオドールの兵士。眠っているベリセールの殺そうとするが、昇進を告げる書類を見て改心する。

R: フィリップ: 廷臣。皇帝の側近。ベリセールの思う部下たちに襲われたところをベリセール本人に助けられ、再会して恩人が彼だと分かると暗殺を思い止どまるが、投獄された彼には手を貸せない。皇帝の命令を第一とする宮廷人で、処刑に立ち会い、その報告を行う。

R: ナルセス: ベリセールの副官。昇進を条件に殺人を唆されたが、眠っている上官の枕元に推薦の書類を見付け、思い止どまる。そして次の暗殺を未然に防ごうと努力する。彼が冤罪で投獄されると無力である。

R: レオンス: ベリセールの軍隊の隊長たちのうちの一人。凱旋パレードの雑踏の中で、巡礼者に変装して彼を殺そうとするが、昇進の約束を得て改心する。ナルセスとともに彼を助けようとする。しかしやはり投獄後はなにもしない。

#### その他

D: ヴィティジェ: ゴートの王。ザクセンに進攻してベリセールに屈服する。領土も王冠も没収されるが、ジュスティニアンに命乞いをしてくれたベリセールのために、彼が冤罪で拘束されると皇帝を説得する。相愛のアマラズントに彼がしつこく付きまとったにも拘らず、彼に劣らぬ高潔さを示す。

R: カミーユ: 皇后の侍女。聞き役。最後に真相を報告する。

ざっと眺めたただけだが、デフォンテーヌの登場人物たちのうち、比較的身分が高い設定をされている者はベリセールと同等かそれ以上の高潔さの理解者であり、殆ど無節操とも思えるほどに寛容である。そしてベリセール本人も進攻して助けた国の女王に、あたかも弱みに付け込んだようにして恋を打ち明けるなど、ギャラントリーを発揮する。しかし全員が宮廷における自分の身分を弁え、バランスを取ることがうまい。皇帝を頂点にしたヒエラルキーは安定しており、絶対にそれを乱すことはない。「主人公」であるベリセールですらも皇帝の高潔さ、寛容をこえない。それがこの宮廷

の暗黙のルールであって、最大の礼節なのだ。それに対し、ロトルーの登場人物たちの作っているヒエラルキーは安定性を欠く。高潔さにおいてはペリセールの優位を認めながら、現実の宮廷では皇帝への絶対服従を義務付けられているから、ペリセールが皇帝の下位にいる間はこの二重規範が暴露されることはないが、同等かそれ以上になったとき、身分の表示とのずれが一挙に現れてしまう。たとえ「皇帝」でも主人公の圧倒的な力量には道を譲り、英雄を描くための添え物か光に対する影として登場しなければならない。デフォンテーヌでは皇帝が自分のものとして一致させていたヒエラルキーがロトルーでは皇帝を演じるジュスティニアン個人とは別に独立に存在している。従って、ペリセールを除いた各人物がこの現実のヒエラルキーと高潔さのそれとのバランスを取って行こうとする。ペリセールひとりがそこから浮き上がっている。テオドールを媒介して見るこのふたつの宮廷では、デフォンテーヌの登場人物たちは身分と高潔さを見事に一致させており、ロトルーの登場人物たちはそうではない。後者はその「現実の」宮廷での身分よりもむしろ「ペリセールの物語」の中でのポジションの方に忠実なのだ。

## 作品の構成

### 1) 物語の筋

両者ともに物語の主要な筋はテオドールによるペリセール殺害である。その点では物語の筋は共に統一された一つであるといえる。物語の概要の節で整理した通り、事件の連続は未遂と再度の攻撃、そして大団円に結ばれる。そしてテオドールのペリセールに対する恋愛感情が直接の殺人の動機とすれば、不幸な恋愛劇の一面をこの物語に見ることができる。これを別の視点からペリセールを中心とした登場人物間の恋愛関係に注目してみると、デフォンテーヌでは二組の結婚で幕が閉じ、ロトルーでは一組の顛末が語られるという対照が現れる。

#### デフォンテーヌ

ジュスティニアン→テオドール→ペリセール→アマラゾント↔ヴィティジェ  
イスキリオン→ソフィー→  
ナルセス→

#### ロトルー

ジュスティニアン→テオドール→ペリセール↔アントニー

ロトルーにはデフォンテーヌにあったアマラゾントとヴィティジェの関係がない。ペリセールとテオドールの過去のいきさつをもとに宮廷内の人物たちだけで演じる。前に見たように、登場人物数はデフォンテーヌでは11人、ロトルーでは10人である。実際に舞台となる場所と同様、人物の関係や筋においても密封度が高いようだ。以下では具体的に場所、時間、場の連続について検討する。

### 2) 場所

デフォンテーヌ、ロトルーともに物語の舞台はコンスタンティノーブルで、主に宮殿の中である

が、いくつかその周辺に設定された場面もある。しかしスペインの原作にあったといわれるアフリカへの遠征旅行などはなく、まずまず、場所の一致は図られているといえよう。ペリセールの遠征の描写はもっぱら登場人物たちのせりふに含まれている。各場ごとに場所を推定する。

#### デフォンテーヌ

一幕・ 1/ 宮殿大広間、2/ 宮殿大広間、または皇后の控えの間、3/ 前場と同じ、4/ 前場と同じ

二幕・ 1/ 宮殿の近くの森の中、2/ 前場と同じ、3/ 前場と同じ、4/ 前場と同じ、5/ 前場と同じ、6/ 前場と同じ

三幕・ 1/ 宮殿大広間または皇后の控えの間、2/ 前場と同じ、3/ 前場と違う場所、宮殿の回廊か、4/ 前場と同じ、5/ 前場の近く、6/ 宮殿大広間、または皇后の控えの間

四幕・ 1/ 宮殿大広間、2/ 前場と同じ、3/ 前場と違う場所、皇后の控えの間か、4/ 前場と同じ、5/ ペリセールの寝室、6/ 前場と同じ

五幕・ 1/ ペリセールの寝室か、2/ 皇后の控えの間、または宮殿大広間、3/4/5/6/7/ 前場と同じ、8/ 前場と同じ、9/ 牢獄、10/11/ 前場と同じ、12/ 宮殿大広間、13/ 前場と同じ

一幕は概ね宮殿大広間で、二幕はその近くの森の中、三幕は再び宮殿大広間か皇后の控えの間、四幕は大広間とペリセールの寝室、五幕も四幕と同じ二つの場所になっている。テキストには指定がなく、推定の域は出ないが、少なくともコンスタンティノーブルの宮殿大広間、森の中、ペリセールの寝室、牢獄の四つの場所は必要である。

#### ロトルー

一幕・ 1/ 宮殿近くの沿道、2/ 前場と同じ、3/ 宮殿の大広間、4/5/6/ 前場と同じ

二幕・ 1/ 宮殿大広間、2/3/ 前場と同じ、4/ ペリセールの執務室、5/ 前場と同じ、6/ 宮殿の大広間、7/8/9/10/ 前場と同じ、11/ 前場の近く

三幕・ 1/ ペリセールの執務室まえの廊下、2/ ペリセールの執務室、3/4/ 前場と同じ

四幕・ 1/ 宮殿大広間、2/3/4/5/6/7/ 前場と同じ

五幕・ 1/(ペリセールの執務室近くの)宮殿大広間、2/3/4/5/6/7 前場と同じ

確実な指定があるのは三幕二場のペリセールの執務室の場面のみだが、状況から見て最低限、沿道、宮殿の大広間と執務室の三つの場所を必要とする。また五幕一場では執務室に入って行く登場人物が指定されているから、この場所はペリセールの執務室近くでなければならないとわかる。デフォンテーヌの方に見られた森の中と牢獄がない代わりに、宮殿の沿道の場面がある。宮殿の外はこの一幕一場だけで、残りの全部が宮殿内で展開する。外の情報は報告の形で宮殿内に伝えられる。デフォンテーヌの方は場面の移り変わりに変化があり、ロトルーの方はより集中していて、閉じた空間という印象があるだろう。

#### 3) 時間

では、時間の構成はどうなっているのか。デフォンテーヌは時間の経過を示す言葉を特に用意していない。イスクリオン、ナルセスとの遭遇は森の中だが、「日の光を遮る」という表現から、昼間であると分かる。ペリセールが眠る場面も、夜を暗示しない。ロトルーは第二幕十一場(最終場)に、

「好ましい夜よ、私の無実を日の光に示しておくれ」というベリセールのせりふを置いている。第三幕二場、三場のベリセールの偽りの眠りの場面は、従って、夜であり、第一幕から第三幕までがその日の昼から夕方、夜で、第四幕四場に「皇帝をお探せねばなりません、狩りに行くので私をお待ちなのです。」というベリセールのせりふが見られるので、第四幕は翌日の早朝である。同じ四幕七場には、皇帝にベリセールが「皆が陛下を待っています、時間が過ぎてしまえば、今日の狩りの希望は奪われてしまう。」という場面がある。段々日が高くなってきているのだろう。以降は別に時間の表示はない。デフォンテーヌはあまり時間に注意をしていない。一日で終わることもできれば、引き伸ばすこともできる。それに対しロトルーは第三幕の夜を中心にその前後に各幕を配分している。しかし場所のところで見たように、舞台は殆どが室内で展開する。次に場ごとの人物の配分を見よう。場の連続は原則として人物のつながりで保たれるから、場所と時間を推定するのに大きな手掛かりとなる。

#### 4)場の連続

両者の各場の人物の配分は以下の通りである。

##### デフォンテーヌ

- 第一幕・ 1/皇帝、テオドール、ソフィー、アマラゾント、ベリセール、ナルセス、ヴィティジェ、ディオファント、衛兵二人 2/テオドール、ソフィー、ナルセス 3/ソフィー、ナルセス 4/ナルセス
- 第二幕・ 1/ベリセール、ディオファント 2/ベリセール、イスキリオン、ナルセス 3/ベリセール、イスキリオン、ナルセス、暗殺者三人 4/ナルセス、イスキリオン、ベリセール 5/ベリセール 6/ベリセール、ディオファント
- 第三幕・ 1/テオドール、イスキリオン 2/イスキリオン 3/ベリセール、アマラゾント 4/ベリセール 5/イスキリオン、ベリセール、ドリストレル 4/テオドール、ドリストレル 5/ベリセール 6/ドリストレル、ベリセール 7/ベリセール
- 第四幕・ 1/ヴィティジェ、アマラゾント 2/ベリセール、ソフィー 3/テオドール、イスキリオン、ドリストレル 4/テオドール 5/ベリセール 6/ドリストレル、ベリセール 7/ベリセール
- 第五幕・ 1/ベリセール、ディオファント 2/テオドール 3/ソフィー、テオドール、ディオファント 4/テオドール、ソフィー 5/テオドール 8/ソフィー 9/ソフィー、イスキリオン、ピランドル 10/ソフィー、イスキリオン、ベリセール 11/ソフィー、イスキリオン、ベリセール、テオドール 12/皇帝、アマラゾント、ヴィティジェ 13/皇帝、アマラゾント、ヴィティジェ、テオドール、イスキリオン、ソフィー、ベリセール、ピランドル

連続が切れる場は、第三幕三場、六場、第四幕三場、五場、第五幕二場、八場、十二場である。すべてが後半にあり、一、二幕にはない。散文の物語であれば、「一方そのころベリセールは、」というように前場との同時性を示すような場合で、場所は変わっている。第一幕一場は主要な登場人物が全員集合し、紹介される。また最終場も自殺したナルセスと最後の暗殺者ディオファントを除き全員が顔を揃える。

## ロトルー

第一幕・1/ベリセール、アルヴァール、ファブリス、衛兵たち 2/同じ人々、レオンス(巡礼者の扮装) 3/テオドール、カミーユ 4/同じ人々、アントニー 5/同じ人々、皇帝、ナルセス、フィリップ、衛兵 6/同じ人々、ベリセール、アルヴァール、ファブリス、レオンス

第二幕・1/アントニー 2/フィリップ、アントニー、テオドール 3/ベリセール、アントニー、テオドール 4/ベリセール、皇帝、衛兵 7/ナルセス、皇帝、衛兵 8/テオドール、皇帝、衛兵 9/テオドール、フィリップ 10/同じ人々、レオンス、ナルセス 11/フィリップ、ベリセール

第三幕・1/アルヴァール、ベリセール 2/ベリセール、フィリップ 3/ベリセール、ナルセス、皇帝、アルヴァール、衛兵、テオドール、フィリップ 4/同じ人々、ナルセス、レオンス、衛兵

第四幕・1/テオドール、カミーユ 2/ベリセール、テオドール 3/同じ人々、アントニー 4/テオドール、アントニー 5/テオドール、皇帝、衛兵 6/同じ人々、カミーユ、パージュ 7/ベリセール、皇帝

第五幕・1/ベリセール 2/レオンス、ベリセール 3/ナルセス、ベリセール 4/フィリップ、ベリセール、兵士 5/同じ人々、皇帝、衛兵 6/皇帝、レオンス、ナルセス、衛兵 7/同じ人々、カミーユ、フィリップ

連続が切れるのは第一幕三場、第二幕十一場の二回。前者では、場所が沿道から宮殿内に移動する。後者では、剣を打ち合う音が聞こえて来るというト書きにより、同じ場所であることが示される。時間は同時ではなく、進んでいる。登場人物が全員集合するのは、第一幕六場で、このような状況はこれが最後である。最終場は事件の当事者であるベリセール、テオドール、アントニーを除いた主要登場人物が揃う。

このように両者とも場所、時間は殆どせりふの内容と符合する。デフォンテーヌで行われていた同時性を示すための場所の移動と登場人物の連続の切断はロトルーでは一度だけあった。始めに述べた通り、場所は宮殿の内外、時間は一日をめやすに構成される。しかしあえて対照を探しながら比較してみると、デフォンテーヌ作品はロトルー作品より脇筋があること、場所の変化、時間の不明確さ、登場人物の数などからやや散漫な印象を受ける。それよりもロトルーが緊密な人間関係、空間の閉塞、時間の濃密さに注意していると考えた方が良いかもしれない。前者は当時の悲喜劇にありがちな構成であり、後者は古典劇の原則に忠実であろうとしている。

### 5)変装・指輪・眠り・手紙・その他

両方の作品でこの時代に流行していた登場人物の変装が使われている。デフォンテーヌの場合は、ナルセスがベリセールを狙うイスキリオンを阻止しようとして、森の中で顔を隠して襲撃し、この仮面の役を果すすっぽりと顔を覆う帽子のせいで、ベリセールに逆に討たれてしまう。これが第二幕である。次いで、投獄されたベリセールを救うため、イスキリオンとソフィーが彼を訪ね、ベリセールにソフィーの服を着せて逃がそうという場面であるが、これはベリセールに拒否される。ロトルーはもっとはっきりとしている。第一幕で、レオンスが巡礼者に変装し、ベリセールを殺そう

とする場面がある。レオンスはその扮装でもって、レオンスという上官が自分にひどい仕打ちをしたと訴えるのだが、ベリセールは今回の戦いでレオンスの功績を称賛し、きっとおまえにも報いてくれるだろうと、見ず知らずの巡礼者の彼にも金の鎖を与えるのだった。ベリセールの高潔さを示すのに大変に効果のある変装である。

いのちの恩人を示す指輪も両方に現れる。デフォンテーヌはイスキリオンからベリセールへ、ロトルーはフィリップからベリセールへ、証拠の指輪が渡される。同じように自分が命を狙った人物が実は、森の中や暗闇での襲撃に立ち会い、助けてくれた当人であったと、後でわかる仕組みで、これらはどちらかと言えば助けられたイスキリオンとフィリップの方が試される。

眠りの使い方はデフォンテーヌよりロトルーの方が凝っている。まず、デフォンテーヌは眠っているベリセールを殺そうとしたドリストルが枕元に昇進の書類を見付けるのであるが、これはロトルーでもナルセスがやはり同様の約束をされている。もっともナルセスはイタリアの総督で、ドリストルは將軍までいかないのだから報酬の大小は異なっている。ロトルーはこれとは別に、眠ったふりをして、いわゆる寝言というか、うわごとで、自分の命を狙う人物が皇后のテオドールだと、皇帝に知らせる場面がある。第三幕二場及び三場。

ベリセール : (前略)陛下がいらした、いっときやすんだ様子で、まだ目覚めぬように、わたしはあの方にこのことを告げよう。そして意図せぬふうを装ってわたしの敵の名を言おう。わたしの命を守りたいと、わたしに嘆かせることなく、あの方にしらせよう。

ベリセールの執務室に入った皇帝は彼の声を聞く。

皇帝 : 夢は人間の情念を表す一枚の絵。休息のなかでわたしたちの苦痛を表現して見せる。信用のない聞き役、口さがない話し手、最も隠しておきたい秘密も外気にさらす。眠っている人の口には用心していた真実が、我とは知れずわたしにその敵の名を明かす。

そして、なお眠ったふりを続けるベリセールの所へ今度はテオドールが直接手を下しに来る。皇帝と側近はタピスリの後ろから一部始終を見る。こうしてテオドールは現行犯で拘束される。皇帝がその場で与えた力を使ってベリセールは皇后の犯罪を許す。この眠りのトリックはベリセールの並外れた寛容を示すのにどうしても必要である。また、この場面こそがテオドールとジュスティニアンにベリセールの高潔さが誰より勝っていることを強く自覚させる。

手紙については「手紙のトリック」のところで述べた。デフォンテーヌはソフィーへの敵意を込めた手紙であり、ロトルーはアントニーへの恋文に近い内容だったが、二通ともベリセールからテオドールへの恋文の役割を果たす。この横恋慕のあいまいな証拠によって試されるふたりの皇帝の行動は途中までまったく同じだった。デフォンテーヌの皇帝は説得を聴き入れ、許す。それほど内容は変わらないし、まして本人の弁明は理路整然としているにも拘わらず、ロトルーの皇帝は許さない。彼は殺されなかったのを許したベリセールほど寛容でも、高潔でもない。

その他に、デフォンテーヌではナルセスの恋と忠誠の板挟みの果ての自殺が舞台の上で行われる

し、その前に勿論、襲撃のシーンがあって、剣を打ち合う。ロトルーもこうした闇討ちのシーンがある。いずれも近くで叫び声や剣を打つ音が聞こえて来る。

変装、指輪、眠り、手紙などはみな登場人物たちの寛容や高潔さを試すものになっている。決闘、闇討ちシーンはベリセールの腕前を直接見せる。彼の観念的な武器である高潔さと現実の剣の腕前とのバランスが舞台上でどれほどとれているかは疑問だが、剣を持たない武人というナンセンスを避けようとしているのか。しかし、ベリセールの行動は生臭さを極力抑えている。

## 6) ビャンセアンス

皇后が報われなかった昔の恋の腹いせに、皇帝の寵臣を殺すという設定自体に既にビャンセアンスに抵触するものがあると思われる。しかしそれはさておいて、舞台上のビャンセアンスに目を転じて見れば、デフォンテーヌではなんとといっても自殺の場面があることが第一に問題になろう。また牢獄の場面も華やかな宮殿にはそぐわないのではないか。ロトルーではベリセールの拘束は執務室の前で行われ、彼が処刑される場面はフィリップの報告で描写される。

もうひとつ、デフォンテーヌには目立たないのに、ロトルーに特徴的なのが、皇帝のベリセールへの過剰な愛情である。デフォンテーヌの登場人物たちも彼を尊敬し、愛すべき人物にしているが、ロトルーの皇帝がベリセールに向けるせりふは寵臣に対する賛美を越えて生々しい。テオドールの嫉妬はアントニーに向けられるだけではなく、皇帝の過剰な愛情を注がれるベリセールに対するものようでもある。第一幕四場の皇帝のせりふはこう述べている。

皇帝 : (前略) 皇帝の心を占める者は帝国を手に入れる。その帝国はおまえの物、わたしはおまえの法の下にこの帝国を委ねよう、わたしがおまえに負っているものをおまえに返すだけなのだ。(皇帝は指からふたつの指輪を抜くと、ベリセールに与える。) 帝国の要人を示すこのふたつの指輪はわたしたちの間では、同じひとつの力を示すものとなろう。一方の指輪が他方の指輪のなしたことの保証となるよう、同じしるしが同じ効果を示すように、さあ、これを取りなさい。そしておまえは第二のわたし自身となっておくれ。わたしの臣下たちの下でひとつの帝国を治めよう。そしてわたしたちの間に完全な調和の絆を結んで、ふたつの身体にひとつの心と魂を持てるようにしましょう。

「ふたつの身体にひとつの魂」という表現はロトルーがよく男女の恋愛関係を描く時に使う。この後も皇帝はベリセールを分身、似姿と言っている。皇帝のベリセールへの愛情が単なる部下への褒賞とは別のものだったとすれば、テオドールの「ベリセールへの」嫉妬、夫を取られる妻の嫉妬は正当化されようし、「恋人」が自分の妻に抱く愛情に対して夫が耐えられない裏切りを感じてもよい。この表面では問題にされない三角関係は怪しいが、見過ごせない。「過去」は確かにテオドールのベリセールへの復讐が軸になる。しかし、皇帝と寵臣の疑似同性愛、それに嫉妬する皇后の物語としてこの作品が展開する「現在」を見ることは可能だろう。デフォンテーヌは舞台上に自殺や牢獄の場面を乗せている。ロトルーにはそうした場面はなく、目に見える逸脱は避けられているが、登場人物の関係には、デフォンテーヌになかった複雑怪奇さがある。上のジュスティニアンへのせりふは

皇后へのプロポーズと差し替えても不自然ではないだろう。

#### ふたりのペリセール

デフォンテーヌとロトルーの「ペリセール」を物語の内容と構成の面で多少比較してみた。当時の観客たちは最初に詩句を耳にしていたであろうから、大切な部分が抜けていることになる。例えば、同じようなシチュエーションで、ふたりのペリセールがそれぞれどんな言い回しをしたか、などは興味がある。皇后に詰め寄られたときのペリセールはこう言っている。

#### デフォンテーヌ 第五幕十一場

(前略)もし陛下が陛下の栄誉というものをわたしに対して惜しまないならば、わたしがここで陛下の恥と同様、わたしの不幸を公表することを許さないで下さい。それでもそれをお望みなら、そういたしましょう。わたしは陛下に忠実に仕えなかったでしょうか。陛下の心が怪しい方向へ傾いたのを見たときにわたしは、陛下の欲望よりも美德の方を優位に置かなかったでしょうか。わたしは陛下のために何もしませんでしたか。陛下の魅力に逆らい、理性で武装し、陛下の盲目に付け込むことなく、陛下の願いにも自分の判断をつけました。ああ、よくお考えください。テオドールさま、陛下を軽蔑するどころか、どんなに陛下を尊敬していたか。女たらしのわたしの魂の声も聞かず、陛下の幸福を救うためにわたしは自分の快樂などは犠牲にして、陛下の憎しみを買うようにどんな行いをしてきたでしょう。

#### ロトルー 第四幕二場

(前略)それでも陛下の地位は、その高貴なご身分は、尊敬という言葉の前ではわたしの望みを萎えさせてしまうのです。わたしに、ありえない希望を求める過ちが犯せたでしょうか、わたしは鈍感だったのではなく、敬意を払ったのです。わたしには分かっておりました。自分を神聖なひかりに近付ければ、ただ明らかに墓場しか得られぬことを。このように栄誉の過ぎた恋にただの人間が近付いても無駄。(中略)あなたの頭上に結んだ聖なる絆があなたの望みの貴い征服者のしるし。しかし、わたしにあなたに捧げるべき王冠があったでしょうか。崇拜し、耐える以外わたしになができたでしょう。そしてわたしはどんな顔をして御前に出られたでしょう、自分の女主人の恋人、皇帝の恋仇としてでしょうか。

デフォンテーヌのペリセールはテオドールの魅力を十分に理解し、自分の方こそがそのありもしなかった恋では犠牲者なのだと言わんばかりである。一方ロトルーのペリセールも同様の論理の展開で説得を試みるが、この場面ではただもうテオドールの身分や自分の過去の地位の不釣り合いだけを問題にして、デフォンテーヌの甘さはない。だからテオドールにアントニーとの関係を指摘されると、とたんにしどろもどろになる。テオドールの憎悪が宥められるどころか倍加するのは当然だと思われる。前に述べたように、デフォンテーヌのペリセールも高潔な人物ではあるのだが、その宮廷社会での身分の弁えをよく心得ていて、決して皇帝以上の高潔さを示そうとはしない。相手の行動にも、自分の行動にも常に逃げ道を準備し、傷付けることを嫌う。そうした行動を取れないナルセスは自殺する。そしてこの自殺は傷付くことに慣れないペリセールにとって大変な衝撃である。しかしその後ですぐに恋する女性に言い寄っている。自ら「女たらしの魂」の持主とって憚らな



い。ロトルーのベリセールは口では身分の弁えを唱えながら、実は宮廷社会の建前のルールを無視し、皇帝を凌駕しておとしめる。ロトルーのジュスティニアンはベリセールの道化であり、いつの間にか宮廷の規範という「妻」を寝取られた夫にされてしまう。物語の概要、登場人物の関係、構成は大同小異といってよい。しかしロトルーのベリセールの頑なさ、人に譲ることを知らない、弱みを見せないやり方はデフォンテーヌの宮廷人としてのベリセールにはない。仕事も恋愛も見事にこなし、友人の自殺も忘れ、皇帝の姪と婚約する優雅な宮廷人の姿は消え失せ、あえて無実の罪に死ぬ高潔な英雄がそこにはいる。二つとも名目は同じ悲喜劇であるが、前者は宮廷恋愛劇であり、後者は英雄悲劇というにふさわしい仕上がりである。ふたりの皇帝の結びの言葉が示唆的である。

#### デフォンテーヌ

この幸いな日が永遠に続くように。わたしの心がほんの少しだけそれを望めば叶う、正義のために目隠しを取り除けば、エロースの神は楽しい気まぐれによって、わたしの目から不吉な飾りを払ってくれる。そしてその代わりにエロースの絆を付けてくれる。わたしたちに嵐を起こしたこの小さな神は、ご自身で頭上から雷雨を遠ざけてくれた。あんなにも恐れた力は誤らせるどころか、わたしたちを港につけてくれたのだ。

#### ロトルー

(前略)かような事態を招いた後に、もしわたしの血がおまえの墓の上に流れ、天の許されぬ判決を我から先に実行することができるならば、心地よい敵よ、そこでおまえに会おう。あのように美しい生と早すぎる死をおまえが考えることになろう裁き手の足元で、愛しい魂よ、おまえの死を償う幸運をくれ。おまえの魂に結ばれ、あとを追うように。おまえなしでどんな期待がわたしに残っていよう。おまえの死は国家全体にとって不吉な不幸。そしてその一撃はあまりに永く血を流し、わたしの待っている死の希望を裏切りはしまい。

前文の呼び掛けはテオドールになされているのがはっきりしているのに、この最初のセンテンスの「おまえ」が誰に対するものか曖昧である。文法上はやはりテオドールでよい。内容を文脈に沿って常識的に読めばベリセールとすべきであろう。もしそうであれば、「おまえ」の指示内容が段々ずれてしまったことになる。ジュスティニアンの狼狽の産物なのだろうか。この結びのせりふの対照は、同じように劇を結ぶことを皇帝の役割、特権としながら、際立っている。神意を理解する天と地の媒介者である王と、神に見捨てられた地上の王のちがいがいるように思う。

このふたつの「ベリセール」は優雅な宮廷人を描いた恋愛劇と高潔な英雄を描いた悲劇とに対比できる。では残されたもうひとつの「ベリセール」はどうだったのだろうか。ロレはちょうどコルネイユの「エディップ」が上演された後、同じ年の六月にオテル・ド・ブルゴーニュ座の演じた「ベリセール」を評して、次のように言っている。

悲喜劇のうちで、その主題が際立ち、重々しく大胆な作品を見るならば、非常にうまく決着がつき、心を奪い、気にいるにふさわしい作品、それならば、オテル・ド・ブルゴーニュ座の大先生たちの中であってこの方を一人、不滅にしてくれるあの有名なカルプルネードの「偉大なベリセール」を見なければなりません。十年来の傑作と、偽りなしに申せましょう。最も忘れ難い諸作品に立ち交

じっても素晴らしい詩句があり、千エキュの値打がごさいます。それを演じるフロリドールは優美さと精神の力に富んでいて、世界で一番の役でした。

その「傑作」は未刊で、今は内容がわからない。重々しく、大胆という表現からは悲劇的要素が、また非常にうまく決着がつく、あるいはフロリドールの優美さという表現からは恋愛劇の要素が推測されるが、それまでである。殆ど1、2年の間に上演した作品で、作家によってこれほど差があるのだから、第三のペリセールもずいぶん違った顔をしていただろう。

## 注記

### 使用テキストについて

Desfontaines: Paris, Courbé, 1641. マイクロフィルムコピー

Rotrou: Viollet-le-duc. 復刻全集版 (Paris, Sommaville et Courbé, 1644.)

デフォンテーヌ、ロトルーともに冒頭の初演年は推定の域を出ない。ランカスターの日付はデイエルコーフ=オルスポエルによれば、「何もこれらを保証するものはない」ということになっている。ただし、出版年だけは確定している。引用したせりふのいちいちに脚注は付けず、幕と場だけを示す。参考文献も書名と主要部分のみ、順に記す。

### 参考文献

Lancaster, A History of French Dramatic Literature in the 17th century, PART II, vol 2, pp.382 - 3, Desfontaines's Bélisaire. ibid. PART II, vol 3, pp.532 - 534, Rotrou's Bélisaire. New York, 1966, Gordian Press Inc.

W.Deierkauf-Holsboer, Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne, II, pp.50 - 51.

Jacqueline Van Baelen, Rotrou, le Héros tragique et la révolte, pp.125 - 143, BELISAIRE: LE JEU DE MIROIRS, Paris, 1965, AG Nizet.

J.Loret, La Muze Historique, 1650 - 65, TOME III, 1659, pp.76 - 78, Lettre 27, Samedi douze juillet, 1878, ÉD par CH. L. Livet, Libraire Editeur de la bibliothèque Elzévirienne.

### 語彙について

文中、「高潔さ」あるいは「寛容」としたのは、「générosité」の訳語のつもりである。